■パネルディスカッション『特色ＧＰ・現代ＧＰの意義・実績と今後の展望』

○進行：おはようございます。本日はお忙しい中、お集まりいただきまして、誠にありがとうございます。定刻でございますので、これより「平成18年度大学教育改革プログラム合同フォーラム、パネルディスカッション」を始めさせていただきます。

初めに主催者を代表いたしまして、文部科学省大臣官房審議官、村田直樹よりごあいさつさせていただきます。

○村田：おはようございます。

本日は、「平成18年度大学教育改革プログラム合同フォーラム」にご来場いただき、誠にありがとうございます。昨日から開催されております本フォーラムも、おかげさまをもちまして、大変多くの方々にお集まりいただいております。昨日ご講演いただきました有馬先生を初めとする高等教育に深いご見識をお持ちの先生方のお考えや、各大学等の取組について直接意見交換できる貴重な機会として、お集まりいただいた皆様方から多くの期待を寄せられているものと感じております。

平成の時代に入りまして、個性化、高度化、活性化をキーワードに、大学改革が進められてまいりました。当初、自らを研究者と位置づけがちな大学教員が多いとの指摘・批判の中で、教育重視の大学改革が求められてきたわけですけれども、近年では、少子化の進展や国立大学の法人化などを背景といたしまして、魅力ある教育を実現できるかどうかが、大学の存廃にかかわる状況になってきております。

そのような中で、文部科学省では、教育改革支援の柱となる事業といたしまして、「特色ある大学教育支援プログラム」、「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」を実施してまいりました。これらはいわゆるプロジェクト・ファンディングでございまして、各大学の教育の一部分を切り取り、あるいはある角度から光を当てて支援するという性格のものでございます。

当該大学の教育プログラム全体に、どのようなインパクトを与えているのか。文部科学省といたしましても、この点についてのエビデンスを得ながら、さらなる支援方策を検討していく必要があると考えております。

これから行われますパネルディスカッションでは、ただいま申し上げました、いわゆるＧＰプログラムを中心に、これからの大学教育改革のあり方をご議論いただくこととなっております。

ご来場の皆様方におかれましては、それぞれの大学で改革に向けた議論を活発に進めていただくとともに、これらのプログラムに積極的に申請していただければと期待しております。

最後になりましたが、今回のフォーラムに出席していただいております各プログラムの審査員の先生方、事例報告校の先生方に、この場をお借りして改めて厚く御礼を申し上げまして、ごあいさつとさせていただきます。（拍手）

○進行：それでは、パネルディスカッションに移らせていただきます。本日のパネルディスカッションの関係の資料ですが、お配りしております冊子、115ページからが、本パネルディスカッション関係の資料になっております。

それでは、パネリストの先生方をご紹介させていただきます。まず初めに、特色ある大学教育支援プログラム（特色ＧＰ）の実施委員会委員長、前国際基督教大学学長の、絹川正吉先生でございます。続きまして、現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代ＧＰ）選定委員会委員長、大学評価・学位授与機構教授、荻上紘一先生でございます。株式会社リクルート進学カンパニー「カレッジマネジメント」編集長でございます、中津井泉先生でございます。ＮＨＫ解説委員でいらっしゃいます、早川信夫先生でございます。関西国際大学長、濱名篤先生でございます。

それから、本日の司会をお願いしております、また、現代ＧＰの副委員長もされていらっしゃいます、関西大学法学部教授、永田眞三郎先生でございます。それ

から、本日、オブザーバーとして参加させていただいております、文部科学省高等教育局大学改革推進室長、伊藤学司でございます。

それでは、これから進行を永田先生にお願いしたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

○永田：司会の永田でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

本日は、パネルディスカッションといたしまして、特色ＧＰ、現代ＧＰの２つのプログラムを中心に、現在のあり方、あるいは、学内、学外に対するその影響、そしてこれからのあり方等を、パネルディスカッションというかたちで進めていきたいと思います。90 分という短い時間でございますが、よろしくご協力願いたいと思います。

最初に、本日パネリストとしてお願いしております５名の先生方からそれぞれお話をいただきまして、引き続き、パネリストの先生の間で議論をいただきます。そのあと、若干時間をいただきまして、会場にお越しの皆様方からご意見やご質問を頂ければと存じます。このような予定で進めてまいりますので、よろしくお願いいたします。

それでは最初に、特色ＧＰの実施委員長であります絹川先生から、特色ＧＰのこれまでのあり方、意義等について、ご報告いただきたいと思います。お願いいたします。

○絹川：それでは、特色ＧＰについて、要点だけを申し上げさせていただきます。

詳細はお手元のレジュメに書いてございますので、ご参照いただければと思います。

『ＩＤＥ』という雑誌をご存じだと思いますが、その特集号の中で、「ＣＯＥ・ＧＰ型競争的資金」というタイトルのものがございました。特色ＧＰもその中に含められているわけですが、「特色ＧＰというのは競争的資金配分プログラムなのか」ということが、私の第一の問題提起です。

もちろん特色ＧＰは、ＣＯＥを初めとする、この間の文部科学省による一連の競争的環境を醸成する政策の一つであることは間違いありません。しかし、特色ＧＰが単なる競争的プログラムの一つとは言い切れないところに、特色ＧＰの特色があると、私は考えております。

その印となるのは、特色ＧＰの業務を文部科学省から委託されている大学基準協会という存在です。当初、初年度は、特色ＧＰは大学基準協会への文部科学省からの委託事業でありました。その後、文部科学省の事業に変わったわけでありまして、大学基準協会が事務局を務めているというかたちになりました。

大学基準協会は、ご承知のように、加盟大学間の相互評価が中心です。最近は第三者評価機関ということになりまして、多少、性格は変わってきておりますが、いずれにしましても、自律性を尊ぶ大学の本性に根ざした相互評価のあり方というものを、基準協会は目指しているわけでありまして、特色ＧＰというものが、日本の大学の質を共同で向上させようと図る取り組みとして、大学基準協会に委託したということを通して、そういうことが定義されているというか、性格づけられているわけです。

初年度、この話が始まりましたときに、実は補助金の話は全くなかった。とにかく大学の教育の質を一緒に考えようということで、文部科学省のほうからボールを投げた。大学側がどう受け止めてくれるかというお考えが、当時の担当官の小松さんからもあったわけです。その後だんだんと、ご褒美と言ったら何でありますが、せっかく採択されている大学に対しては予算的にも金銭的にも若干の補助をしてみてはどうかという話が出てきて、補助金が付くようになったわけです。

したがって、私どもの実施委員会は、補助金の配分に関しては全く関知いたしません。ひたすら優れた大学教育とは何かということを選択する、考えるということに専心しているわけです。

そういう趣旨から言って、特色ＧＰというのは、日本の大学の教育の質の向上を協働で図るという立場ですから、特色ＧＰの主な仕事は、もちろん採択という審査行為がありますけれども、メインは、例えば昨日

ありましたような特色ＧＰのフォーラムです。そういう席で紹介される取組事例を参照しながら、大学教育の質の向上をどう図るかということを、参加者が一緒に考える。そういう意味では、私は口癖なんですが、特色ＧＰのフォーラムというのは、広い意味でのファカルティ・デベロップメントであると考えているわけです。

そういうことは、特色ＧＰの評価の留意点と申しますか、普通は「基準」と言いますが、私どもは「基準」という強い言葉は使いませんで、「留意点」と言っていますが、留意点にもいろいろ表れてくるわけです。特に本年は、学位を与える課程ごとに申請をお受けするというかたちになりました。これは昨日も申しましたが、非常に大事なことで、特色ある大学教育プログラムと言うと、とかく、そのプログラムの独自性、独特性が際立つ。際立つことによって、本体のそれぞれの大学のトータルな教養課程との関連が見えなくなってしまうということになりますと、これは本末転倒であります。ですから、私どもの審査の留意点では、そういう一つ一つの取組が、大学教育全体の中でどういう位置づけを持っているのかということに、一つの関心を寄せているわけです。

もう１つは、教育は、先生方お一人お一人の独立した営みではなくて、大学というところでの教育は、大学構成員の共同的な営みである。そういう共同的な営みがきちんと行われているかということを、私どもは拝見させていただいているわけです。

教育というのはイベントではないわけで、日常的な努力の集積ですから、私どもの評価の留意点の中に特段に書き出しました一つのことは、真摯な教育努力を継続的に積み重ねていることを評価する。こう言いますとちょっと語弊があるかもしれませんが、当たり前のことをきちんとしているかということですね、大変失礼な言い方ですけれども。そういう気持ちでもって、いろいろな事例を拝見させていただいているわけです。

特色ＧＰの成果をどう考えるか。大変難しいことでありまして、いろいろなことが言われております。特に特色ＧＰという、予算規模から言いますと、今 35 億ぐらいの予算規模ですが、ＣＯＥに比べますと、格段にレベルが違うわけです。それだけの小さな予算でもって、これだけの効果をあげたということは、文部科学省の政策としては大成功であるという評価もあります。半分皮肉かもしれませんけれども、そういう評価もあるわけです。

特色ＧＰの成果をどう考えるか。いろいろな問題がありますが、私は今日特にここで申し上げたいことは、日本の社会というのは、正当な大学を評価する視点を持っているのかということです。こういうことを言うと傲慢に聞こえますが。社会は、本当に大学を、その内実に伴って評価をしているのかということを、私は常に気にしているわけです。

例えば世上の大学ランキングというものを考えますと、先日見たものでは、驚いたことに卒業生の生涯所得比較というものがあって、生涯所得比較でもって、これは平均の話ですが、一番所得の多いのはＩＣＵだというわけです。ＩＣＵがそういうふうにランキングされることを私は喜べるかというと、全く違うわけでありまして、むしろ恥ずかしい感じがするわけです。

そういう評価、あるいはランキングとか、あるいは社会の関心の表れ方というものと、私どもの特色ＧＰの営みと、何かちぐはぐなわけです。ちぐはぐな責任はどちらにあるのか。もちろん大学側にもあります。大学側が、きちんとした情報公開をしていないということもあります。

しかし、深刻な問題は、先日、高校の必修科目の学習漏れという問題が起こって大騒ぎしていますが、あそこに一つ象徴的に表れているように、日本の高校のあり方、もちろん大学の入試にも責任がありますが、日本の高校のあり方が大学入試ということに絞られてしまって、極めて功利的、合目的的に行われているところに問題があるわけです。

後でいろいろお話があるかと思いますが、大学受験生が特色ＧＰに関心を持たないというところに、いわば日本の今の高等学校の教育の問題性が表れているのではないか。それだけ言いますと、大学側の反省がないということで叱られますけれども、大学側は、もちろんいろいろと反省をし、考え直し、特色ＧＰに参加しているわけです。

そういう立場から考えて、日本の社会は、正当な大学評価ができない。そこに、一つの大きな問題を感じているわけです。

特色ＧＰの成果というのは、端的に幾つか兆候が見られますけれども、私は、これから出てくるのではないか。じわっと出てくる問題ではないか。それが、私の特色ＧＰに対するフィロソフィからの見方です。

時間ですので、ここまでです。

○永田：どうもありがとうございました。特色ＧＰの基本的な視点、単に競争的教育研究資金という視点からではなくて、真摯な教育努力が継続的に行われているかという視点から、この特色ＧＰを考えておられるということかと存じます。

その成果につきましても、社会あるいは高等学校の評価の視点、教育の視点を強調され、大学側の情報発信の問題等も指摘いただきました。

それでは続きまして、現代ＧＰの選定委員長でございます荻上先生から、お話しいただきます。現代ＧＰのこれまでのあり方、意義等について、お話しいただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

○荻上：特色ＧＰと現代ＧＰの２本の柱でＧＰが走っているわけですが、どこが違うかということをよく言われて、なかなかその違いを明確に説明するのが難しいようなところもあります。

今、絹川先生から特色ＧＰについてお話がありましたが、そのかなりの部分は、そのまま現代ＧＰにも当てはまります。そういうわけで、できるだけ話が重ならないようにというふうには考えましたが、私は現在、大学を評価する仕事をしておりますので、そういった視点も合わせて、少しお話をしたいと思います。

よく言われているように、「競争的環境の中で個性輝く大学を作る」というキーワードでいろいろなことが語られているかと思います。

最近は、大学が組織として、いろいろな評価を受けなければいけないということになっています。その中には、法律で受けることが義務付けられているものと、大学の自主的な判断で受けるものとがあります私が担当している現代ＧＰというのは、大学が自主的に受ける第三者評価の一つと考えることができると思います。

大学あるいは大学の先生方は、いろいろなかたちで第三者評価を受けていらっしゃるわけですが、大学の先生方は、研究に関する第三者評価というのは十分に慣れていらっしゃると思いますが、教育に関する第三者評価というのは、今まであまりお受けになったことがないと言っていいかと思います。

研究は基本的には個人の取組と言っていいかと思いますが、教育も、従来はどちらかといえば教員個人の取組が中心だったと思います。しかし、これから評価されるのは、組織としての教育力ということだと思います。

このＧＰ事業というのは、まず第１に「大学は教育機関である」ということを改めて認識するところから出発する必要があると思います。教育上の優れた取組を、第三者の立場から評価をする。その優れたものに対して財政支援をし、その優れた取組が、大学教育改革のモデルになることを期待する。単に支援期間中だけ優れた取組が行われて、それでおしまいということではなくて、支援期間終了後も、その大学において継続的に発展していくことはもちろん、他の大学からも、大学教育改革のモデルになるようなものであってほしいということです。

現代ＧＰは、ご存じのように、「現代的教育ニーズに応えるべく工夫することに対して、インセンティブを与える」ということで、毎年６つのテーマを設定して、そのテーマごとに申請をしていただき、審査をするという方式を取っております。

先ほども申し上げましたが、これまでは教員個人の取組が主であったと思われる高等教育について、組織的に取り組むものに対して光を当てるという、この「組織的な取組」というところを、審査委員会としては重視しております。

それで、審査は、当然なことですけれども、公正に行われなければならないということで、我々としては、公正性、透明性、客観性という３つに留意しながら、審査をしてきたつもりです。

特色ＧＰが、これまでの実績を重視するという立場を取っていらっしゃるのに対して、現代ＧＰのほうは、必ずしもこれまでの実績にはこだわらない。これまでその取組に関する実績がない場合であっても、申請内容が教育プログラムとして非常にしっかりしていて、十分実現性が期待できるという場合には、選定の対象としました。

今まで必ずしも実績がないものに対して、実現性をどう評価するかというのはなかなか難しい面もありますけれども、新たな方向を探っていくということで、教育改革の視点からは、今までの実績がなくても、将来、期待ができるようなものについては、積極的に選定をするというふうにいたしました。先ほども申しましたが、将来の発展性あるいは他大学への普及の可能性について、十分留意をしたつもりです。

公正性、透明性に関しては十分自信を持っておりますが、客観性に関しては、我々としては、大勢の審査

員の合議のもとに客観的な結論を出したつもりですけれども、当然のことながら、ご不満の向きもあることは、やむを得ないことかと思っております。

ＧＰ効果ですが、ＧＰに申請をするためには、学内で十分な議論を尽くす必要があります。そのためには、当然のことながら、学長あるいは学部長などのリーダーシップが問われることになります。それまで個人の取組の色彩が強かったことから、こういったものへの申請を検討することによって、学部の壁、あるいは学科の壁、あるいは教員間の壁が、随分低くなったと考えられます。

それから、申請することによって、非常に大きなＦＤ効果があると考えます。必ずしも選定されなかった場合でもＦＤ効果が期待できると、我々は考えております。

実際、去年、今年は、私は多くの大学を評価のために訪問しておりますが、ＧＰに申請することによって、あるいは選定された場合はもっと効果が大きいと思いますが、随分大学の教育が変わりつつあることを実感しました。今申し上げたように、学科間の壁、学部間の壁、教員間の壁が、昔に比べて随分低くなっていると見受けております。

来年度も引き続きこの事業は継続されると思われますが、来年度は今年度に比べて、かなり大きな予算規模で行われることが期待されております。まだ予算が確定してはおりませんけれども、今年度 46 億でしたが、来年度は要求どおりにいけば 70 億ということになると思われます。

そういうことで、来年度の見通しをここに書いてありますが、さらにこの事業規模を発展して推進することによって、大学教育改革に貢献できればと期待しております。以上です。

〇永田：ありがとうございました。

現代ＧＰの選定委員長として、荻上先生から、現代ＧＰと特色ＧＰの違いをお話いただき、それから、これは絹川先生と同様ですが、現代ＧＰでも組織的な教育力を問うものであるということが示されたかと思います。

ただいまお２人の先生から、選定する側からのこれまでの２つのプログラムについての意義をお話しいただきました。引き続き、この２つのプログラムは大学の外から見てどうなのか、この両者のＧＰは学内外へどのような影響を与えたかという視点から、リクルート進学カンパニー刊行の「カレッジマネジメント」という定評のある雑誌がございますが、その編集長の中津井先生から、お話をいただきたいと思います。よろしくお願いします。

〇中津井：私は、雑誌の編集を通じていろいろな大学に伺うことが多いのですが、そうした取材の中から感じたことを、少しまとめてみました。

まず、大学の内と大学の外と分けて、どういう影響があったかということですが、ここでは、学内と申しましても、このＧＰに参加した大学についての影響ということで、お話しさせていただきたいと思います。

「大学はこれをどう利用したか」と書いてありますが、私は、４年前に始まったときは、大学は、どう利用していいかあまりよくわからなかったと思います。どんなものか取りあえず出してみるかというような大学が非常に多かったのではないかと思います。そして、いま４年たってみて、ＧＰがここまで出そろってきたところで、初めて、どういう影響があったのかが整理できるのだと思います。

それで言いますと、最初に、学内教育の体制固めに使った大学があります。ごく一部でやっていた小さな試みを、ＧＰに出してみたらいいのではないかということで、それを全学的なものとして仕立てあげて申請するというようなことを、積極的におやりになった大学がかなりあったと思います。ＧＰを学内の教育固めに利用したわけです。

また、現代ＧＰがこの後に出てきたわけですが、２つのＧＰの間にどういう違いがあるかということを考えて、実績型と新規事業型を分けて提出された。そういう意味で、両ＧＰを戦略的にうまく利用したところもあったかと思います。

また、教育力の向上に役立てた。結果として役に立った大学もあったと思います。ＧＰに出すということを旗頭にすれば、先生方にも教育改革を働きかけやすいわけで、一種のＦＤとして、これをお使いになったところもあるだろうと思います。

次にあげた「競争的資金獲得」ということは途中から出てきたことです。最初の特色ＧＰは、先ほどお話がありましたように、資金援助とは何の関係もなかったわけです。後になって、お金が付いてくるということがわかってきた。そこで、３年目、４年目ぐらいになると、初めから、お金を取るぞという姿勢で申請されるところが増えてきました。

最後の教育力の証明ということですが、知名度アップに使おうということで、ＧＰの採択をホームページや広報に利用して、学内外に自分の大学の教育力を知らしめるということです。

こうして、学内的には積極的にお使いになった大学が非常に多かったのですが、それでは学外に与えた影響はどうだったかと申しますと、ここに書いてありますように、対受験者、それから対父母には、ほとんど影響はなかったと思います。どこかで特色ＧＰとか現代ＧＰという言葉を聞いたことはあるでしょうが、それでもって志願者が増えたということはなりませんでした。

では、学外でどういうところに一番影響があったかというと、これは当事者の大学を除けば、大学を取り巻く業界関係者だったと思います。例えばマスコミ界には、ＧＰでランキングを作るという一つの指標ができたわけです。そういう意味では、これをランキングに利用するとか、広告会社はこれで広告費を取るとか、セミナー会社は、セミナーでこれをＰＲするとかというように、ＧＰを利用しようとする思惑はたくさんあったと思います。

それから対地域ですが、地域をテーマにしたＧＰもあるので、その地域にとっては大きな影響があったと思います。また、高校の先生や予備校ですが、受験生に次いで関心を持たなかった部分だと思います。

次に、参加しなかった大学も含めた大学間の影響です。まずコンペティターの大学が申請していれば、うちも負けてはいられないということで、学内の競争心をあおることに繋がったと思います。それから、当然ながら採択大学の事例を参考にしました。さまざまな教育手法は勿論、ＧＰの申請の仕方も他大学のやり方を勉強したと思います。私は、その競争的勉強効果というのが重要だと思います。それから、教育に関する共同プログラムも、このＧＰでクローズアップされたのではないかと思います。

結局ＧＰは、外に対する影響力はあまりなかったけれども、大学界、それから各大学に与えた影響は極めて大きかったと私は思っております。

○永田：ありがとうございました。「カレッジマネジメント」の編集長というお立場からのお話でした。この２つのＧＰは、それに申請した大学内、さらに他の大学に与えた影響は、戦略という点も含めまして大きな意味を持ったといえるけれども、学外ないし広く社会においては、それほど関心を持たれていないのではないかというご報告をいただきました。ありがとうございました。

それでは次に、ＮＨＫ解説委員の早川先生から、個々の大学の問題から少し距離をおいて、現代ＧＰ、特色ＧＰを含めまして、各大学がこういう改革プログラムに参加するという経験をして、日本の大学の教育は、変わったのかという視点から、お話しいただきます。よろしくお願いします。

○早川：皆さんおはようございます。

私の方からの報告ですが、レジュメに、Ａ４、1,000字で、今日話す内容については書いておきました。Ａ４、1,000字で何が言えるのかということに疑問をお持ちの方もいらっしゃると思うんですけれども、５分で話をしろというと、大体この程度の短さの原稿を用意しておけば話が収まるはずですという一つの例として示させていただきました。こんなもんじゃないよとお思いの方もいらっしゃるかもしれませんが、今、中教審の、初中教育の学習指導要領改訂のところで、Ａ４、1,000字程度で言いたいことを言えるということを学ばせようかという検討がなされているわけですが、大体反対しているのは大学の関係者です。それは、Ａ４、1,000字ぐらいでは言いたいことが言い尽くせるわけがないということのようですけれども、そうではないのではないかという私の反論として、こういう紙を書きました。

今日お話しする内容は、そちらを読んでいただければいいのですけれども、あまり予定調和的にやっても面白くないと思いますので最近のトピックで、先ほど絹川先生からご指摘があったのですけれども、トピックとなっているところから話を切り込んでいかないと面白くないんじゃないかと思うんですね。

１つは、高校の未履修問題への対応ということに、我々メディアは追われています。これが大学にとって、今回の現代ＧＰと絡んでですが、大学入試のあり方というところと結びついてくるのではないかなと思うわけです。

未履修問題の分析というのもいろいろありますが、今回のことで一つ浮かんできたこととして、高校で世界史を必修にしているのに、国公立大学の場合、センター試験では、世界史、日本史、地理で選択１科目。二次試験で課しているのは、調べてみましたらば、この春の入試では、千葉大と東京外語大だけです。来春

は東京外語大だけ。これは考えてみますと、歴史学専攻を目指す受験生が、歴史を取らなくても大学に入れてしまうということですね。

今回の一連の大学改革が始まって真っ先に言われたことの一つに、大学がアドミッション・ポリシーを持つことが大事ではないかということがありましたけれども、最近はこういうことが、もう改革をしちゃったということなのかどうかわからないのですけれども、あまり言葉にのぼってきていないような気がします。うがった見方をすると、単にＡＯ入試導入のための言いわけに過ぎなかったのかなと疑いたくもなるわけです。

ここで今回のテーマに戻っていくわけですが、大学は受験生に、大学に入るまでに何を学んできてほしいのかとか、発信すべきことではないかということです。先ほど絹川先生と荻上先生、お２方とも、今回のＧＰというのは大学のＦＤにとって大変有効であったというご指摘があったのですが、私もその点については、非常に効果的であっただろうと思います。その一方で、アドミッション・ポリシーということについての議論にどうつながっていっているのかということについて、ちゃんと議論すべきではないかという気がします。

最近、リメディアル教育というのが盛んになっていますが、大学に入ってからちゃんと一から教えてあげるから安心して入ってきなさいということならば、そういうことを、では大学はきちんと受験生に説明してくださいということだろうと思います。そうした大学の発信力が問われているのではないか。

予定していた内容とは違うんですけれども、ちょっと予定調和を崩すという意味で、そんな発言をしてみました。

〇永田：ありがとうございました。ＮＨＫの解説委員というお立場から、カレントなトピックであります未履修問題をも絡めまして問題提起いただきました。大学側の問題としては、アドミッション・ポリシーに問題がある。そのあたりについて真剣に議論をする必要があり、それについて的確に情報発信ができていないのではないか、というお話でございました。どうもありがとうございました。

それでは最後に、関西国際大学の学長であります濱名先生から、今度は大学の側として、この取組をどのように活用できるか、活用すべきかというお話を伺いたいと思います。よろしくお願いいたします。

〇濱名：濱名でございます。よろしくお願いいたします。大学の長であり、あと、高等教育を専門にしておりますので、その両方の角度からお話をしたいと思います。

申し上げる内容は、簡単に言うと、一元的な尺度から多元的な尺度へ。もう１つは、教育改革というと、これまで教育内容と言うと聞こえはいいのですが、カリキュラムとか、科目名の改革と、組織改革を中心にしていたものから、目標や尺度やペダゴジーや教育課程という、よりソフトなものと、より個別化するべき内容に変わっていくという話です。

まず最初のスライドは、中教審が大学の機能をあげたときに、これだけの７つを並列させているわけです。これだけ多様なものを、高等教育と呼んでおります。

では翻って、大学教育の評価の尺度は何かというと、そこにありますように、偏差値、まだまだこれから問題になると思いますが中退率、就職率、資格取得率、採用試験合格率など、非常に定量的な尺度です。日本人は何でも数値化すると納得するということですが、果たして、７つの機能類型どれを選んでも構わないという大学を一元的な尺度で評価できるかというと、世界の動静は、定性的で質的な評価を含む、Outcome Assessment が主流になってきておりますので、そういう方向へ行くだろうということです。

そうした状況を考えてみますと、日本の大学はどうも、比較の対象によく出てくるイギリス、オーストラリア、アメリカと比べて、産業界でありますとか、受験産業でありますとか、マスコミに非常に受け身的に評価されているといえます。大学自身が多様化しているならば、最適な到達目標は、そこにありますAttribute of Graduates、あるいはイギリスのBenchmark、アメリカはLearning Outcome とか、それぞれの大学が目標を設定するということを、これまでやってこなかった。

考えてみますと、ＰＤＣＡというのはよく出てくるのですが、Ｐのところでの尺度設定自体が、もしかして抜けていたのではないか。そういう点では、今回のＧＰの話は、目標であるとか、尺度設定に大いに改革をもたらす可能性がある。ただし、これまで評価について、我々大学関係者は謙虚すぎて、あちこちから叩かれている。ところが、学生自身の評価の主体で評価をやりますというと、授業評価のことかと思われるかもわかりませんが、そうではなくて、学生たちが、自

分が成長しているという実感を与えられるかどうかということです。学生に評価できるのかということはよく大学人が問題にしますが、この場合は、エビデンスをきちんと添えさせるということが、今のちょうどＧＰが求めている尺度と重なってまいります。

ご承知のように、教育に対する評価はまだまだ低いというのはご指摘のあったとおりですが、問題は２番目です。理工系や研究はいいのですが、学生数の 55%を占める人文社会学系の評価は、放置されていると申し上げてもいい。

さらに、この次のデータは飛ばしてもらっていいのですが、表１、表２に、特色ＧＰと現代ＧＰの変化を示しています。これは冊子の 125 ページに出ておりますが、特色ＧＰは減少傾向で、私大の採択は少ないままです。国立のほうは急速に応募件数が減少し始めている。現代ＧＰを見ていただきましても、これは申請が増えていませんし、私大は低調のままですが、選定件数だけが増えている。

しかし、こういう状態でいいわけはなく、大学自身が目標を立てて、尺度を作って、それが評価されるということへの改革努力が持続されなければ、政策効果は維持できません。

そうしますと、これが実質的な結論ですが、ＧＰなどの取組というのは評価尺度の多元化の端緒になる。大学自身が立てた目標と尺度をちゃんと作っていくということが定着ができるかどうか。これが大学としてのＧＰ活用の一番のポイントになってくる。２番目は、評価対応型教育の文化を導入していく。これはまさに、ドゥー（Ｄｏ）とチェック（Ｃｈｅｃｋ）です。それを日常的にやっていけるのか。そういう発想転換と習慣化ができるかということです。それはすなわちグローバル化への対応にもつながります。そして３番目としては、これはアセスメントと次なるプランの問題ですが、自分たちがどういう目標を選択するのか。これが大学としての自律性を一番左右する。それができれば、４番目の、組織目標の共有と明確化をした上で、内容やペダゴジーを改善していく。先ほど申し上げました目標、尺度、ペダゴジー、そして、それらを組み込んでいく過程という各側面で、大学が活用できるかどうかということが、こうしたプログラムの最も重要な活用の仕方ではないかと思います。

まとめのところはお読みいただければと思いますので、これで終わらせていただきます。

○永田：どうもありがとうございました。現代の大学のあり方、大学の多様化に伴って、これまでみられた単なる組織の改革、あるいは学科名の改革ではなく、教育内容の改革につながっていかないと、本当の大学改革はないというお話でした。そういう意味で、多様な尺度が必要であり重要であるということであろうかと思います。大変密度の濃いお話であり、現在、大学がどのように現代ＧＰ、特色ＧＰを考えていくべきかということの指針を、お示しいただいたかと思います。

それでは、５名のパネリストの先生方からのお話を伺いましたので、ここで少し、パネリストと方々で議論いただきたいと思います。短い時間の報告でございましたので、改めて少し問題設定をして、議論を展開していきたいと思います。

現代ＧＰ、特色ＧＰ、 Good Practice の略称と申しますか、愛されているかどうかはちょっと置いておきまして、愛称で呼ばれております。優れた学生教育の取組を、 Good Practice と呼んでいるわけです。この点につきましては、特に大学の外から見ましてどういうふうにとらえられているかということをお尋ねして、ディスカッションの端緒としたいと思います。

中津井先生、いかがでしょうか。

○中津井：優れた学生支援の取組と一言で言っても、最近は、お話のように多様化しています。先ほど濱名先生から話が出ていましたけれども、本来、大学がやることだけではなく、リメディアルとか、しつけとかを含めて、これまで大学がやらなかったこともやらなければならない。そういうものをやらなければ、本来の大学教育ができない状況にあるわけです。ですから、大学教育が広範囲になって、何が優れているかということを決めるのは大変難しくなってきた。例えば、ある大学にとっては、小学校でやらなければならなかったことや、中学校でやらなかったことも加味して大学教育をやらなければならない。それも優れた取組になる得るわけです。そういう意味では、取組自体が非常に多様になったと思います。

もう１つは、審査要項に書かれていることをやり切っているかと言うことです。組織性だとか、特色性だとかそこでは極めて普遍的なことが提示されているわけですが、その普遍的で当たり前のことをやり切っているかどうかということが、優れた取組として判断されるのではないかと思います。

○永田：２点お話をいただきました。まず、本来、大

学がしなければならなかったことをこれまで考えてこなかった、いま、それをやらざるを得なくなってきているということですが、絹川先生、いかがですか。大学が、先ほど早川先生からもお話がありましたリメディアルとか、そういうこともやらざるを得なくなった。入試のほうの問題もあるということですが、大学がそういうかたちで、日常的なしつけから文章表現、あるいは数学の問題など、リメディアルというようなかたち、あるいはその他のかたちで関わっていかなければいけないという事態について、いかがでしょうか。

○絹川：ご質問に端的にお答えできないと思うんですが、早川さんの問題提起に関連して、大学の入試って何なのかということです。先ほど中津井さんが、大学が本来やるべきことは何なのか。優れているということは、本来やるべきことをちゃんとやっているということだという、極めて単純明快なお考えですね。

大学の入試というのは、ただ選抜する機能に中心があって、選抜するための材料としては、知識というのでしょうか。よく「学力」と申しますが、学力というよりも、むしろ端的に「知識」ですね。そういうものを基準にして、選抜をするところにとどまっているわけです。

本来、大学が大学としてやるべきことをやるためには、最低の条件と申しますか。あるいはそれぞれの大学の個性がありますから、その大学の個性にふさわしいような学生を選ぶということが本来の入試のあり方ではないかと思うのですが、そうなっていないですね。それは、大学側も問題。大学が単なる選別をしているだけだ。どれだけたくさん学生が集められるかというようなことに中心が置かれている。

そうではなくて、それぞれの大学が教育像を明確にして、そういう人間を育てることにコミットしてくれる学生というか、一緒にやろうという学生を選ぶ、あるいは選ばれるという状況が出てくることが、大学が優れているということにかかわっていく事柄だと思うんですね、今の議論の関連で言いますと。

○永田：ありがとうございました。早川先生のお話にもございましたが、現在のカレントな問題として高校の未履修問題があります。大学側は選ぶ側として対岸の火事のように見ておりますけれども、基本的には、大学入試がこれを誘導した。たくさんの受験生を集めるパイが大きいほど、優秀な学生が集まるというような神話もございました。そういう意味で、理系で物理も化学も取らなくても入学できる。英語ですら入試科目でないというような事態であります。社会科の問題もまさにそうですが。

そういうあたりから考えまして、あるべき姿と大学を現実の姿とのギャップがあると思われます。今の大学にとって、早川先生から見られました優れた学生教育はどういうものか。非常に難しい焦点のはっきりしない質問ですが、よろしくお願いいたします。

○早川：先ほど中津井さんの１回目のお話の中で、学外に与えた影響の中で一番影響の届いていないところが、受験生と父母だったというところ。ここが象徴的に表れていることではないかと思うんですけどね。あるべき姿を示していないというのは、まさにそのことを意味しているんだと思うんです。

では、あるべき姿って何だというときに、これはなかなか難問なんですけれども。私がネーミングがあまりよくないというふうに、つい書いてしまったのですが、特色ＧＰという「特色」というところから入ったということで、大学が特色を持たなければという意識が先行してしまったのかなという気がいたします。

ただ、先ほど絹川先生も荻上先生もおっしゃるのは、結局、大学が継続的に地道に改革をしている、教育内容の改革を進めているということを世に示すことだ。そこに尽きるんだろうと思うんですね。それを、何か特色をつけないと世の中にアピールしないというふうに思い込んでいる節はないんだろうかなという気がします。

逆に、地味だけれども、自分たちのところは地味なことをちゃんと真面目にやっていますよということが評価されて、それを発信できることが、本当は大事なのかなという気がします。選考に当たって、そういうことは大事にされているんですよね。

○永田：絹川先生は、特色ＧＰでは、継続的に地道にやってきた改革を評価するんだということをおっしゃいました。荻上先生からは、現代ＧＰは現代的なニーズという一つのテーマを立てて、それをインセンティブにして考えていただくということでした。荻上先生、現代ＧＰの特色について、先ほどのお話もございましたけれども、そのあたりを少し強調してお話いただければと存じます。

○荻上：現代ＧＰは、テーマを決めて申請をしていただく、テーマを決めて、そのテーマに沿って教育プログラムを考えていただくということでありますが、今

お話しされていたような、大学の教育という基本的な観点からすれば、日常的にやるべきことをやるということですけれども、学生が入学してから卒業するまでの間に、どれだけの付加価値が付けられるかという、向上度と言うのでしょうか、それが教育だと思いますね。

現代ＧＰの立場から言えば、テーマを絞ってプログラムを作っていただくわけですから、それが大学全体の教育、その大学に在学するすべての学生に適応できるものではないかもしれませんけれども、優れたプログラムで教育することによって、学生がどれだけ向上するか。それがやはり教育というものを評価する重要な尺度と申しますか、考え方だろうと思いますが、どれだけ向上したかというのは数量的に判定するのは難しい面が大きくて、実際に研究評価に比べて教育評価が難しいというのは、まさにそこだと思います。

教育のプログラムと申しますか、いいプログラムを工夫して、それによってどれだけ学生に力を付けられるかという観点からすると、現代ＧＰより特色ＧＰのほうが、わかりやすいのかもしれません。ただ、申請する側からすると、現代ＧＰのほうはテーマを絞っていますから、わかりやすいということが言えるのかもしれません。あまり答えになっていないかと思いますが。

○永田：ありがとうございました。

中津井先生、あるいは早川先生の先ほどの話では、大学がやるべきことをしっかりと地道にやっているかということでした。絹川先生、特色ＧＰでは、評価の対象となるプロジェクトの内容ですが、基本的な専門領域なり、一般的な領域なり、大学生としての基本的素養を身につけさせるという視点と、出口と申しますか、進路を見据えた教育をしているのか、という両方の視点があると思いますが、特色ＧＰの場合は、当たり前のことを当たり前にちゃんとやっているかというところも重要かと思いますが、そのあたり、教育の基本的な中身、あまり出口を考えない基本的な大学の教育の中身を中心にお考えなのか、あるいは、出口も見据えたものとして両面をお考えなのか。そのあたりはいかがでしょうか。

○絹川：特色ＧＰが、当たり前のことをきちっとやっているかということ。そういう言い方は、語弊がいろいろありますね。当たり前のことって何かというと、先ほど中津井さんが言われたことにつなげるわけですが、大学として本来的なことが当たり前のことなわけですね。大学として本来的なことが当たり前のことであって、その当たり前のことがちゃんとできているかということは、大学が大学として存在しているかという、堂々巡りですけれども、そういうことになりますね。

特色ＧＰの圧倒的多数の事例は、いわゆるユニバーサル化に対応した事例ですね、ほとんどが。中教審の答申等では、一方においては、学部あるいは学士課程教育というのは教養基礎だ。そして、先端的な教育・研究というのは大学院にシフトするということを、明確に言っています。そうしますと、圧倒的にユニバーサル化している大学の問題と、大学院ということに焦点を置く問題性とが、分裂したまま放置されているわけです。

本来、大学が大学としてあるならば、いかにユニバーサル化しても、その根底には、あるべき大学の思いなり思想なり、何かがあるはずですね。それが根底にずうっと地下水として流れていないといけないわけです。ですから、そういう地下水としての流れにかかわるようなユニバーサル化した大学における対応策として、特色ＧＰの事例が出てきているならば、いいわけです。問題は、そこのところが相当クエスチョンなところです。そこのところは非常に難しい問題です。

○永田：ありがとうございました。

中津井先生、それから早川先生の問題提起と重なるものがあると思います。中津井先生がおっしゃった、本来、これまで大学がやらなかったこともやらなければならなくなったというユニバーサル化の問題があると思いますが、同時に、基本的にあるべき大学の姿というものを見据えた、そういうプロジェクトでなければならないという点では、共通のものがあると思います。

少し話を展開いたしまして、濱名先生にお話をお聞きします。今度のプロジェクトは、いずれも大学の組織としての教育力ということが、絹川先生からも、荻上先生からも強調されました。このあたり、この２つのプログラムを濱名先生がご覧になっていて、学長中心とするイニシアティブで進んだものが、本当に大学全体の力の向上に役立っているかどうか。あるいは、場合によっては、その現場の数名の先生からの発案が、大学の一つの方針のようなかたちで表れている。それが大学全体に広がっているのかどうかというような問

題がありますが、このあたり、２つのプログラムの現状を先生がご覧になって、いかがでしょうか。
○濱名：ご指摘のようなところは非常に難しい問題だと思うんですけれども、まず、絹川先生が言われた、当たり前のことをやっているとか、あるいは早川さんがアドミッション・ポリシーの話をされましたが、それらの問題と実は重なっていると思うんですね。

私は時間がなくてあまり申し上げられませんでしたけれども、先ほど言いましたAttribute of Graduatesとか Benchmark というのは、日本のアドミッション・ポリシーのような、あんな抽象度が高くて、読んでもわからないものじゃないですね。本学の卒業生は、卒業時に、これだけの能力、何々ができるというかたちの能力を具体的に、社会に対しても、学内に対しても、学生に対しても、これは宣言すること。ウェブに出てくるんですけれども、そういう状態のことを意味するんですね。

そこまですれば、今おっしゃられたような、要するにトップが勝手に言っているとか、一部の話を申請の段階ではいかにも全学に見せているけれども、中身はそうではないという逃げ道は、講じられないだろう。

そういう点から言いますと、７つの機能類型も含めて非常に多様化していくと、「当たり前」という言葉が禁句になってくるんですね、恐らく。だから、それぞれの大学が選択した機能に基づいてベンチマークを設定して、それに基づいて行われるパフォーマンスであるならば、それはもう弁解のしようがないというかたちになろうと思います。

これまでのところ、特色ＧＰが先に出たことが、僕は幸か不幸かと申し上げるべきだと思うんですけれども、本来、新しいイノベーション、アイデアで出してくる現代ＧＰが先であって、実績のある特色ＧＰが後であるならば、よりよい関係だったと思うんですが、現代ＧＰのほうが後に出てきた。実績を求められる特色ＧＰのほうがいわば減っているのは、やはりインセンティブが少ないし、あるいは逆に評価の仕方とか……。目標と評価が実はセットなんですけれども、ともすれば、実績を求められるものをやろうとすると時間が掛かると思って、どうも今のところ低調になっているので、今度は逆に言うと、特色型のものをフォローアップするようなプログラムですとか、現代ＧＰのフォローアップ・プログラムのようなもの。まさにそういう点では、当たり前の継続性があるかどうかということが問われる状況になってきているのではないかと思います。
○永田：今までの議論の中で、中教審答申の７つの新しい大学のあり方の像が出てまいりました。その機能分化に応じて、それぞれの大学がベンチマークと申しますか、きちっとした具体的な目標を立てて、それを実施していくことが大学の基本ポリシーであるとすれば、組織としての教育力を付けるというこの２つのＧＰも、そういう視点がきっちりしていればうまくいくであろうということであろうかと思います。

それから、特色ＧＰが先行して、現代ＧＰがその後ということ。むしろ逆であったほうがよかったのではないかということですが、ＣＯＥが先行いたしまして、それに対してＣＯＬというようなことが言われまして、それに対応するかたちの制度設計がなされたかと思います。その後、さらに具体的な、現代的な政策目標、政策誘導型のプログラムが誕生したという経緯があるかと思います。

そういうところで、さまざまな取り組み方の問題があるようですが、これまでの成果という点に関しまして、中津井先生のお話では、学内あるいは他の大学に対して、この２つのプログラムは大きな影響を与えたということが言えるかもしれないけれども、高校生も含めまして、学外にはあまり関心がないということのようでした。このあたり、短い時間でご報告いただきましたが、それは、現状では仕方ないというのか、あるいは、これはやはり変えていくべきだとお考えなのか。そのあたり、少し中津井先生、いかがでしょう。
○中津井：私は、現状、しようがないと思っています。大学教育の中身というのは、高校レベルの知識では非常にわかりにくい。しかも今は進学率52％という時代です。志願率で言えば、７割、８割まで行っているわけでほとんどの高校生が大学を目指す時代です。その高校生全員に大学教育の中身まできちっと伝えるということは、ホームページをどんなに充実してみても、いかんともしがたいところがあると私は思います。高校教育と大学教育をクロスオーバーするとか、特色ＧＰの中に高校との連携を取り入れたりして、高校側にもう少し大学進学に対する当事者意識を植えつけるような仕掛けができれば、また違ってくるかもしれませんが、これは非常に難しいことで、いますぐは仕方がないと考えています。ただ、だからやらないということではなくて、それについては、継続的に努力をする

しかないということです。

それをやりながら、まずは大学自体が変わって、教育に対する関心が学内に高まる。そのことがいまは重要だと思っています。

ＧＰというのは一つの教育改革運動、教育こそが重要だということを知らしめる運動だと思います。ＧＰはそのことにおいては、非常に成功したのではないかと思っています。

○永田：高校生にはそれほど浸透しにくい状況があるが、これからそれをしなくてもいいというわけではないということのようですが、高校生が大学の中身に関心を持ち始めているというあたりはいかがですか、中津井先生。

○中津井：高校生は、大学の中身に関心は持っていると思います。それはどのレベルかというと、出口です。自分が将来何になって、どういう仕事に就けるかということについての興味は、世の中が難しくなればなるほど強くなっています。そこから中身への関心が出てくることになりますから、どうしても、学部、学科、分野、しかも資格とか職業に結びつくような非常にわかりやすいものに関心が集まります。

では、そのためにどこに進学したら一番適切な４年間の大学生活を送ることができるか。つぎの選択の問題に対する関心は残念ながらまだ弱い。結局のところ、高校生が関心を持っている教育の中味は、将来、自分にとっての職業と、なりたい仕事というところに行き着いていると思います。

○永田：この点に関しまして、濱名先生、いかがでしょうか。先ほど、あるべき一つの現代ＧＰあるいは特色ＧＰのあり方もお話しいただきましたけれども、今までの話の中で、比較的学内の教育改革にはかなりの影響を与えた。あるいは、学外がこれをうまく利用できるモデルも出てきたというご意見が複数の先生から出てきました。現場にいらっしゃいまして、そういう２つの効果と申しますか、学内効果、そして対大学効果というあたりは、実感としていかがでしょうか。

○濱名：非常に関心が高まってきていると思いますし、教員たち自身の変化が出てきています。ただし、これには大学によってかなり温度差があります。私をＦＤでお呼びいただいても、参加率１割、あるいはそれ以下の大学もあれば、９割以上の先生方が参加される大学もあって、ＦＤ自体はかなり定着化してきていると思います。その際に、私どもの大学のように比較的歴史も浅くて、知名度の低い大学の学長を呼んでいただくことが増えているのを見ても、そういう実感はいたします。

ただやはり一番の問題は、お話に出ています特に高等教育以外の社会の側も大きな問題があると思います。そこのほうが、むしろ問題としてはシリアスで、そのことに対する無力感というのは、非常に感じております。

○永田：早川先生も、大学が変わったのか、改革を本当にされているのかという視点からご覧になっていると思いますが、特色ＧＰ、現代ＧＰも含めまして、教育改革プログラムが少し大学を動かしたなという感じは、お持ちでしょうか。

○早川：もちろん持っています。確かに波紋を広げているなというのは、実感します。私のレジュメにも書きましたけれども、大学の関係者から「書類を書く仕事が増えた」とか、「学内体制を取ることを先にしろと言われて閉口している」とか、そういう文句が出るというのは、そこで何かものを考えるということですから、非常に意味のあることだろうと思います。

それと、実は昨日、一昨日と、ある地方の私立の女子大を訪ねてきたんですけれども、そこで伺った話で、例えば地方都市の２人のお嬢さんがいるとして、１人は非常に偏差値が高くて、東京の名門と言われる大学に合格しました。もう１人のお嬢さんは、それほど偏差値は高くないけれども、我が大学にやってきました。偏差値の高い有名大学に入ったお嬢さんは、そのまま東京に居ついて、両親のもとには帰ってきませんでした。もう一方、我が大学に来たお嬢さんは、地元で就職できるだけの能力を授けました。両親の近くに戻って就職もし、自分としての自立もできるところまで行きました。

子供を送り出すときに、その母親同士は、偏差値の高い某有名大学に子供を入れたお母さんは鼻高々だったけれども、後になって自分の地元に娘が戻ってきてくれたお母さんのほうが、今度は鼻高々になっている。そういう教育をやっているというふうに聞きました。

先ほど冒頭で言ったように、ある一つのポリシーというのは、そういうことなのではないか。これは現代ＧＰを獲得した大学ですので、そういう意識を当然持っているということだろうと思います。

○永田：ありがとうございました。早川先生のレジュメのほうに、「この外圧をチャンスととらえて動きだ

した大学と、愚痴をこぼしながら、やはりお金をもわらなくてはと嫌々ながらついてくる大学との間ではますます差が開く」というふうに書かれていますが、そういうかたちで、この２つのプログラムを活用して、そして、それぞれの学生に適応した優れた教育方法を開発し、それを実施していくことが重要ではないかと思います。

今後の展開といたしまして、荻上先生、現代ＧＰのほうは現状とそれほど変わらないかたちになるのでしょうか。少し新しい展開を、来年度、再来年度、お考えでしょうか。

○荻上：これは私がお答えするよりは、文部科学省のほうから説明していただいたほうがよろしいのではないでしょうか。

○永田：それでは、その前に絹川先生。特色ＧＰのほうは、学位ごとにそれぞれの教育の取組を評価するというかたちに変わったのですが、そういうかたちでこれからも展開されていくということでしょうか。

○絹川：来年のことはわからないんです。単年度の問題でして、予算が通ればということですので、はっきりしたことは言えないんですが、希望といいますか、あるいは初めの計画としては５年間継続ですから、来年が最後の年になりますね。今年、学位を与える課程ごとにという、ある意味では当たり前かもしれないけれども、ある意味では画期的な区分を設けたのですが。そういう路線は、当然、持続する。ただ、早川先生から、大体申請書のフォーマットがなってないというのが書いてありますので、随分工夫しているつもりですが、いろいろ改善すべきことは、たくさんありますね。そういうところについては多少の努力はして、来年は、少なくとももう１年やらせていただきたいと考えています。これは、予算が通ればの話です。

○永田：荻上先生の最初の報告のお話の中の最後に、来年度の大学教育改革プログラム全体についての一覧のような表が出てまいりましたけれども。

それでは、伊藤室長、現段階では難しいところもあると思いますが、どういう方向でお考えかということをご説明いただければありがたいと思います。よろしくお願いいたします。

○伊藤：来年度以降というかたちですが、私ども、いわゆるＧＰ型支援というものについては、非常に大きな効果を、大学改革というような観点でも出しておりますし、大学教育の質の向上という観点でも、非常に効果をもたらしていると思っておりますので、ＧＰ型支援というのは、むしろこれから、毎年度毎年度、より充実をさせていきたいと思っております。

そういった観点で、19 年度も、それぞれの予算につきましては、特色ＧＰは予算額的には前年同ですが、これは既に支援を終える過年度選定分がかなりありますから、新規の取組も相当取れるというだけの予算要求をさせていただいておりますし、現代ＧＰについても、相当な新規選定ができるような予算を要求させていただいております。ただこれは要求段階ですから、財政当局と厳しく折衝しながら、今、少しでも多くの額を獲得したいと思っております。

そういう観点で、来年度は、引き続き、特色ＧＰ、現代ＧＰいずれも、今の方向性のもと、より充実をしていきたいと考えております。ただ、20 年度以降、さらに将来的にこれをどうしていくかというところは、私どもは大変悩ましい課題であると思っております。効果は出ておりますので、大きな意味ではこれを拡充していきたいと思っておりますが、一方で、濱名先生のご指摘にもございましたように、例えば申請件数という観点から見ても、特色ＧＰで年々少しずつ減ってきているという状況もありますし、現代ＧＰもさまざまな工夫をしながら伸ばしておりますが、今年度、例えば申請をしなかった大学に、その理由を聞くと、やはりなかなかテーマに合うような取組はないんだというような声もいただいているところです。

こういうような声も踏まえながら、特色ＧＰ、現代ＧＰそれぞれについて、一定年数支援を実施したら、それを大幅に見直していきながら、より魅力あり、またより大学教育改革ということの促進剤として効果をもたらすような施策に、私どもも変えていかなければいけないだろうなと思っておりまして、そういう意味では、効果というものをしっかり検証することが、まず私ども行政としては大変重要だと思っておりますので、今日のこういうパネルディスカッションの中でも、その多方面にわたる効果をどういうふうに把握していけばいいのかというような、私どもが検討する中での一つの参考となる情報をちょうだいできればなと思いまして、今日のイベントも開催をさせていただいたところです。

また、会場の方々、いろいろな大学の方々、またいろいろなステークホルダーの方々からもご意見をいただきながら、前向きな改革をしていきたいと思ってお

ります。
○永田：どうもありがとうございました。
　それでは、パネリスト間のご議論はこれぐらいにいたしまして、残された時間が少しではございますが、会場からご質問とかご意見がございましたらいただきたいと思います。いかがでしょうか。
○橋本：今日は静かにしていようと思ったのですが岡山大学の橋本でございます。
　質問自体は、多分、早川さんがいいのではないかなと思います。どういうことかと申しますと、昨日、有馬先生がこの壇上で、高等教育予算を２倍に増やそうというところで、会場に拍手を促されました。私もつい拍手をしてしまったのですが。それに象徴される部分が、実は特色ＧＰ、現代ＧＰとも、ある意味では金の分捕り合戦になっていて、そのパイを増やそうという話にも聞こえるわけです。
　我々は、大学人である前に、日本国民であるということを考えたときに、日本が抱える巨額の財政赤字、財政再建が、私などが説明するまでもなく、しきりに言われております。そういう中では、何かを削って高等教育予算を増やせという話ではなくて、何かを増やすと同時に、高等教育予算も、可能ならば少し縮小すべきであるという考え方も、一理あると思うんですね。
　そういったときに、私が何を質問するかというと、例えば、特色ＧＰ、現代ＧＰともに言えることですが、もう少し対費用効果と申しますか、安上がりでできるものをちゃんと評価軸に加えてほしいというふうに、私などは考えております。
　もっともこれは、岡山大学の意見ではございません。大抵私は発言するときに岡山大学を代表するようなかたちで発言するのですが、この部分に関してだけは、岡山大学は金を要らないと言っているのではないので、そこは誤解のないように。特に伊藤室長にはそこを念を押したいんですけれども、一般論としてそういう考えがあることに対して、例えば、いろいろなことに言及されている早川さんはどうお思いかということで、一つ質問してみました。
○永田：ファンディングの問題も少し触れようかと思ったのですが、時間の関係で、パネリストの方々のご意見を伺えなかったのですが。今、大学の高等教育に掛ける予算の問題も含めまして、早川先生にご質問でございますが、いかがでしょうか。
○早川:私は予算に特に詳しいわけではありませんが、ただ、先ほど濱名さんからご指摘があった、特色ＧＰの申請件数が半減している。そして現代ＧＰのほうは、申請件数は変わらないけれども、選定件数が増えている。
　こういう中で、先ほど伊藤さんが頑張って予算を獲得してくるというお話でしたけれども、これは皆さん容易に想像がつくと思いますけれども、仮に私が財務省の担当者だとすると、こういう状況についてきちっと説明ができないと、多分、お金を出しますよという話にはなかなかなってこない。つまり、申請をするところが減ったり、申請件数が増えずに選定件数だけ増えるという状況の中で大学をどう変えていくのかを説明できないと、恐らく財務省の担当者は「うん」と言わないだろう。
　もう１つ、先ほど橋本先生から、納税者側から見たら、という話がありましたけれども、納税者である、これから大学に入ってくる人たちの親が、大学をそれだけ支持してくれているのか。つまり、しようがない、大学という卒業の肩書が必要なために大学に行かせるんだというぐらいの意識しか持っていないとすれば、大学にこれだけ大きなお金を投じることが必要なのかというふうに議論されてしまうのは、当然のことだろうと思います。
　その意味でこそ、私は発信、発信と言っているのです。最近、いわゆる制度論的には非常に大学改革ということについての大学のニュースは出るんですけれども、大学自身の、中がこういうふうに変わったということの発信が、なかなかメディアに乗らない状況であると、伊藤さんがいくら孤軍奮闘して財務省を説得しようとしても、お金を引き出せないんじゃないかなという気がします。
○永田：ありがとうございました。
　橋本先生からは、対費用効果の問題も評価軸に入れるべきだというようなこともございました。もう１つ財政の問題で、チェックの問題ですが、実際にそういう効果をあげて実施されているかという点について、伊藤室長いかがでしょうか。
○伊藤：まさに今、早川さんからご指摘いただいたようなことを、私は財務省から日々言われております。大変厳しく責められておりますが。
　私どもは、この事業なり、個々の取組に対する支援がどういう効果を出しているのかという部分について、今、さまざまな観点からいろいろエビデンスを証

明していかなければいけない状況だと感じております。これは、絹川先生がおっしゃったように、じわっと出てきているのは間違いないんですけれども、それをいかに見せるかというところが、対財政当局的には求められていますし、実はこれは、対国民に対して説明すべきことなのだと思っております。

もちろん個々の取組について、まずは、それぞれの取組の中で、しっかりとチェック、ＰＤＣＡサイクルを導入していただいて、その中には評価尺度というものをしっかり持っていただかなければいけないんですけれども、学生がどれだけ伸びたか、付加価値を付けたか、満足度、またそれに対する社会の評価というものを、まずは個々の取組でしっかりビルトインしていただいて、それを外に発信していただきたいというのが大前提だと、私どもは思っております。

その上で、私どもはそれをしっかり横串して刺しながら、事業全体の評価というかたちで、そろそろ目に見えるかたちで示さなければ、身内、大学関係者の満足だけで終わってしまうという厳しい批判に対して、効果的な反論ができなくなるのかなと思っております。これは、まさに今日会場に集まっている皆様方に強くお願いするところでございますし、私どもも肝に銘じて、そこのところをしっかりやっていきたいと思っております。

○永田：対費用効果を評価基準にというのは、すぐに回答は得られないかもしれませんが、財政あるいは費用の効率的な利用、あるいは効果という点についての、ご回答がございました。

それでは、そのほかにご質問ございますでしょうか。

○草場：大阪大谷大学の草場と申します。今までお聞きしておりまして、多少虚しい感じがいたしております。と申しますのは、選定率が、研究に対する支援と、教育に対する支援と、同じようなレベルで考えられている。十数％の選定率でございます。やはり２極化しつつある。何年連続しても選定されない。教育と研究とは、やはり違うのではないか。地道なことを確実にやらせるというのが教育であるならば、もう少し多くの大学が、この資金を受けられるようなシステムを考えていただきたいと思います。

それから、個別の問題ですが、退学者が非常に多い。１割以上かもわかりません。そういう者に対しては、現代的な課題として、現代ＧＰではひとつ取り上げていただければという気がします。

最初にも関係しますけれども、もう少し小さなプログラム、 500 万円単位ぐらいのプログラムで、多くの大学が参画できるようなプログラム開発をお願いできればと思います。以上です。

○永田：どなたにということも難しいのですが。絹川先生、荻上先生、もう少し選定率を高めてほしいいというご意見ですがいかがでしょうか、選定する側として。

○絹川：今おっしゃられた事柄は、そのとおりなんですね。特色ＧＰは、そういうふうな対応の仕方をするものではないわけです。ですから、特色ＧＰがすべて、あるいは現代ＧＰがすべてではないのであって、もう少しこれまでの経験を踏まえて、今問題提起があったようなかたちに、プログラム全体が発展する必要がありますね。

ついでだから申しますけれども、現代ＧＰが栄えて、特色ＧＰが衰えるというのは、おかしいと思うんですね。なぜこういうことが起こるのか。そういう点も整理するために、これは文部科学省が指導しているわけですから、文部科学省に申し上げますが、一度、全体を総合的に検討したらどうか。現代ＧＰは明らかに特色ＧＰの分家ですから、分家は一度本家に戻って、本家の言い分をちゃんと聞く。全体をもう一度再構成して、今、問題提起されたようなことも含めて、お考え直しになったらどうでしょうか。

○永田：どうですか。まず荻上先生のほうで、選定率の問題で、やはり選定にあたられる側として、いかがでしょうか。

○荻上：選定率に関していえば、20％程度しか採択できないということに、審査に当たる者としては、いつも非常に心を痛めております。といいますのは、２割程度しか優れた申請がないのであれば、問題ないと思いますけれども、だれが見ても非常に優れた申請というのもあり、また、だれが見てもこれは駄目だというのもありますけれども、なかなか甲乙付けがたいという申請が非常にたくさんあります。そういった中から２割程度をどうしても選ばなければいけないというのは、我々は非常に苦しい思いをしております。しかし、予算の枠等に縛られておりますので、これは仕方がないと思いながら、いつも苦しんでおります。

○永田：ありがとうございました。私も絹川先生のもとで特色ＧＰのほうにかかわって、その後現代ＧＰにかかわり、荻上先生のもとで、副委員長としてやって

いることから発言しにくい部分でもあります。全体的にもう１回見直すということも含めまして、小規模のプログラムがあってもいいのではないかという質問がございました。伊藤室長、今後の展開として、どういうふうにお考えでしょうか。

○伊藤：先ほどの話でいけば、絹川委員長がおっしゃったように、特色ＧＰ、現代ＧＰですべてではない。私どもはご案内のようにデュアルサポートということで、基盤的経費と、こういう競争的な資金。ファンディング論から見るとそういうようなかたちでやっているわけですけれども、例えば、競争の少ないというか、実質的競争のないところで、小口の特色ある私立大学の取組を支援させていただこうということで、来年度の私学助成においては新しくそういう範疇も設けて、金額も小さい、そしてまさにそれぞれの大学の課題に対応するようなものを、しっかりとご要望があればご支援をさせていただくという部分は、私学助成という中で、そういう範疇を新しく要望させていただいたところでございます。

そういうものとの総合的な組み合わせということですので、この特色ＧＰ、現代ＧＰだけで何かすべてが変わるというのは、予算金額を見ていただいてもおわかりのように、全体の基盤的経費と比べると非常にごくわずかでございますから、そんなことはないわけで、それは実は幻想なわけでございますので、そこは、幻想を幻想ということでしっかり見ていただいた上で、それぞれの大学でお取り組みいただきたいと思っております。

ただし、500 万ぐらいのものを作ってもらいたいということですが、実際に、特色ＧＰにしろ、現代ＧＰにしろ、マックスは例えば 1,500 万円とか、 2,000 万円要求できますということですけれども、 500 万円ぐらいの支援の規模を現実に希望し、その額だけ支援をさせていただくという取組も、たくさんございます。であるからこそ、あれだけの件数を実は確保できているというのもございまして、逆に、 1,600 万という基準額があるから、無理にでも 1,600 万にしなければいけないと思っている大学がもしあれば、それは誤った認識でございますので、是非この場で改めていただければと思っております。

それともう１件、絹川先生がおっしゃったことについては、先ほど申しましたけれども、私どもはこういうかたちの事業を支援させていただきながら、４年目、また来年は５年目を迎えるわけですので、確かにそろそろ私どもは原点に返って、もう一度、全体として見直さなければいけない時期に来ているなということは、思っております。

○永田：それからもう１つ別の質問として、いま大学で退学者が非常に多い。新しい安倍政権の再チャレンジ政策にもつながると思いますが、こういう問題に対応する教育についても、テーマとして考えるべきだということでございますが、荻上先生いかがでしょうか。

現代ＧＰのテーマ選択の仕組みについて、簡単にお話しいただけませんでしょうか。

○荻上：毎年６つのテーマを設定して募集しておりますが、このテーマを設定するのは、選定委員会ではなく文部科学省でございます。選定委員会が何か意見を述べることはできますけれども、選定委員会としては、文部科学省から、来年度はこれこれのテーマで募集しますということで、その選定作業を我々がお引き受けしているという設計になっていると私は理解しております。

○永田：私も現代ＧＰに副委員長としてかかわっておりますので、簡単に申しあげます。現代ＧＰは政策誘導型であるといわれますが、テーマは、文部科学省が任意にということではなくて、さまざまな答申であるとか、あるいは意見書であるとか、あるいは法律であるとか、そういうものから、この現代的な教育ニーズをくみ上げて、幾つかの候補を出して議論して決めるという仕組みです。

そのほか、ご質問ございますでしょうか。大分時間を延長いたしまして、恐縮でございますが。

最後にそれでは、パネリストから一言ずつ、まとめの話をいただきたいと思います。それでは、濱名先生から順番でお願いしたいと思います。

○濱名：では、若干申し上げさせていただきたいと思います。

中退率の話が出てきましたが、一つ大きな問題があります。おそらく現在の現代ＧＰは、７つの機能類型をある程度ベースに考えていらっしゃるように私は拝察するのですが、高大接続というのは、かなり根本的な問題なのです。そこの部分が視野に入っていないことが、高等学校関係者がなかなかここへ来ていただけない理由でもあると思うのですね。

例えばキャリア準備に関する情報は、例えばアメリカの場合、ＡＣＴの収集した中高から大学までのキャ

リア支援情報については継続的に利用可能ですし、イギリスの場合も同様です。収集したキャリア支援情報を利用するという継続性や接続性がない。個人情報の接続利用の問題が視野に入ってこないと、難しいのではないか。あるいは効果測定というような、すき間を埋めるようなところをきちんと考えていく必要があるということが１つです。

もう１つは、これは文部科学省関係の方にお願いしたいと思うのですけれども、申請件数が減っている大きな理由は、大きなファンディングの問題がもちろんあると思うのです。もう１つ、どうしていいかわからないというときに考えていただきたいのは、教育方法とかペダゴジーという問題です。ある有名国立大学の工学部学生への調査結果で失望が多かったのは、教育方法に対するものだったのです。

そうしたことを考えていきますと、絹川先生や私が常任理事をやっております大学教育学会が、11 月 25、26 日に、金沢大学で課題研究集会を開きますが、その前日に初年次教育を中心にしたペダゴジー改革のワークショップを予定しております。案内は本日会場の文部科学省のブースに置いていただいておりますので、方法論にも関心を持っていただくように、是非大学へ戻って話していただけないだろうかということです。大学と文部科学省と両方に一言ずつでした。

○永田：それでは、早川先生、お願いいたします。

○早川：冒頭で申し上げたことと同じことですけれども、結局は、大学が学生をどう育てたいのかということに尽きるのではないのか。そのことを、こうした仕組みを使って、どう発信していくのか。そこをうまくやりさえすれば、大学はよくなっていくのではないかという期待感を持っています。

そのときに、教員がこうしたいということも、それはそれで大切かもしれませんけれども、やはり学生が将来どういう人物になってほしいのか。この大学は、そのためにこういう教育をするんだということ。そのために大学が何ができるのかということが問われているのではないかと思います。

今回の特色ＧＰ、現代ＧＰについては、せっかくいい芽が出てきているけれども、このことについての成果を発信し続けていかなければ、つぶされてしまう危険性だって大いにあり得る。そこは、継続こそ力と言いますから、皆さん是非つぶされないように、せっかく出てきた芽が、せめて葉っぱが広がり、木が茂るところまで本当は行ってほしいんです。教育というのはやはり時間の掛かるものだと思います。３、４年、５年ぐらいで終わりということにならないように、10 年、20 年、発展的にいい制度になっていくように、皆さんで水をまいたり、肥料を加えてあげてほしいなと思います。

○永田：ありがとうございました。それでは中津井先生、お願いします。

○中津井：私が申し上げたいのは、こういうものをもっと戦略的に使いましょうということです。それから、研究に比べれば、教育のＧＰは何て安上がりなんだろうということです。この程度のお金で、これだけの成果が上がれば上々だろうと私は思います。これがまたしぼんでしまうということになると非常に残念なので、たくさんの申請を出して資金を獲得していただきたいと思います。申請がたくさん出るということは、高等教育は重要で、そこにはお金を投入すべきだと社会に思わせる一つの戦略だと思うのです。

もう１つは各大学自身がこれを戦略的に使うということです。現在さまざまな競争的資金がつぎつぎと生まれ、それらは旅館の建て増しのようにさまざまなところにばらばらに存在しています。そのため，その全容や関係は、大学からは見えにくくなっているように思います。そこを各大学は解きあかして、うちはこれとこれを取ると、戦略的に地図を描いてみる。そういう組み立てをすることが重要ではないかと思います。こうした見方をすることが大学の経営戦略にもつながるとことだと思います。その結果として、たくさんの大学が申請されることを希望いたしております。

○永田：ありがとうございました。それでは、荻上先生からお願いいたします。

○荻上：私はこのＧＰ効果が、いわゆる大学改革の中で、組織を守るための改革から、学生のための改革という方向へ随分大きく向いてきていると見ております。受験生あるいは父母にほとんど理解されていないというのは非常に残念だとは思いますが、まだこの年月からして、ある意味でやむを得ないと思います。受験生や父母にこれが理解されるようになるためには、ＧＰによる取組が、どれだけ学生がそこに在学して卒業していく間に、付加価値を与えることへの貢献をしているかというところが見えるようにならなければいけないと思います。

その意味で、各大学は、今以上に積極的な情報発信

をしていただきたいと思います。ホームページ等ですべて掲載していただいてはいますけれども、大学によっては、ずうっと奥のほうにあって、そこにたどり着くのが難しいというようなところに置かれているところも見受けられますので、もっと積極的な情報発信をし、それから、入った学生に対しても、ＧＰによるプログラムでどういうふうに大学が変わって、自分たちがどういう教育を受けられているのかということが、直接理解できるように工夫をしていただければと思います。

○永田：絹川先生、よろしくお願いいたします。

○絹川：特色ＧＰ、現代ＧＰ等々のプログラムをお考えになった文部科学省のご努力と申しますか、それについては心から敬意を表します。

その上でですが、先ほども申しましたように、なぜ特色ＧＰの応募数が少なくなって、現代ＧＰのほうは500、 600ですか。特色ＧＰのほうは毎年 100ずつ減っていますので、そのうちゼロになってしまうんじゃないかというおそれがあるわけです。

それで、現代ＧＰと特色ＧＰと何が違うのかという、それぞれのキャラクタリスクと申しますか、特性というものを自分なりに分析して、いろいろと考えておりました。独断と偏見ですから、そこはお許しいただきたいと思うんですが、１つだけ申しますと、現代ＧＰは、どうも麻薬じゃないかと思うんですね。これは使用を注意しなければいけないですね。麻薬は効くときはもちろん効くわけですが、使用方法を誤ると大変なことになります。それに対して特色ＧＰは、栄養である。ちょっと言い過ぎでしょうか。

言いたいことはどういうことかというと、文部科学省の政策はそれなりに効果を持ち、また効果を求めざるを得ないわけですが、にもかかわらず、先ほど来、本来的なあり方というようなことも申しておりましたけれども、大学が大学らしくあり得るように、いろいろな政策が立案されてほしいと思います。大学が大学らしくあるということが一番大事だと思うので、そのことは、端的に効果を求めるというようなことから少し離れている事柄ですので、もう少しスパンを長くして、おおように見てほしいですね。

大学は駄目だ駄目だと言われていますけれども、そうでもないんです、日本の大学は。駄目だ駄目だと言われるほど駄目ではない。やはりやるだけのことはやっているということを、特色ＧＰの経験を通して感ずるわけですので、もう少しおおらかにできないかということを最後に申し上げたいと思います。

○永田：ありがとうございました。それぞれのパネリストからご意見を伺いました。さまざまな問題を抱えて、このプログラムの制度そのものの改革も必要ですけれども、基本的には、一定の大学教育の改革に地道な効果を上げつつあるということは、共通の認識であろうかと思います。これを戦略的にも活用して、大きく広げていく。早川先生がおっしゃったように、みんながタネをまいて、そしてこれを育てて、大きな木になっていくまで、少し長いスパンでこの仕組みを育てていこうということが、共通の理解であったかと思います。

会場の皆様が期待された内容と若干ずれたかもしれませんが、司会の不手際で、十分な展開ができませんでしたこと、そして若干時間が延長いたしましたことをおわびいたしまして、今日のパネルディスカッションを終わりたいと思います。本当にありがとうございました。（拍手）

○進行：先生方、ありがとうございます。まだまだ楽しいお話を伺いたかったところでございますけれども、時間でございます。また、本日、会場にご出席いただいた皆様方も、お忙しいところご参加いただきまして、誠にありがとうございます。

本日、合同フォーラムの２日目ということで、並行しまして、ポスターセッション、あるいは午後から幾つかの分科会も用意されております。お時間の許す限りご出席をいただければ幸いでございます。

また、お手元にアンケートをお願いしております。出口のアンケート回収ボックス、あるいは文部科学省の腕章をした係員がおりますので、係員にお渡しいただいても結構でございます。アンケートにご協力をお願いいたします。本日は、どうもありがとうございました。（拍手）

（了）